

看護部が実践と研修の成果を発表

病院の内外で研修や実践を行った足跡を発表する「看護部伝達講習会」が18日夜、城西病院で開催されました。3組から病院内外の研修や実践事例が発表され、約80人の看護師たちが熱心に勉強していました。



内科病棟の染谷奈緒美さんは「糖尿病患者の意識づけへのかかわり—初めての行動変容を強いられて」をテーマに発表しました。

60歳代の女性が初めて糖尿病と診断され、その患者さんと寄り添い、生活指導や食事療法を通して病気への不安を取り除く中で、退院後の日常生活を円滑に進めるための精神的なサポートをしていく取り組みを発表しました。染谷さんは「個々に合った指導、かかわりで患者さんの退院後の生活をイメージしながら援助していきたいと強く感じた」と結びました。



手術室の瀬戸井涼さんは「ホスピタリティとコミュニケーションについて」を発表しました。

一見、畑違いとも思える百貨店での研修に参加。地域に密着した経営展開や顧客に対する接客の姿勢などを通して、病院での患者さんに対する接遇を考察し、百貨店での接遇を通し、病院での患者さんに対するホスピタリティを再確認したと報告。

「自分の看護観や患者さんと接しているときの自身の様子を振り返る良い機会となりました」と話しました。



回復期リハビリ病棟の福田佳代さん、野口知美さん、堀江加奈子さんは「回復期リハビリ病棟での退院支援事例発表」をテーマに発表。外傷性くも膜下出血などで入院した80歳男性を通し、入院時の看護やリハビリの様子を紹介。看護師、社会福祉士、ケアマネジャーとの連携で、自宅での看護の注意点やデイサービスの利用などを指導。発表では「自宅に戻った男性と家族はとってもいい笑顔を見せていただいた。この体験を今後にいかしていきたい」と結びました。

発表後、藤田尚代部長は「いい看護を提供できた、精神的サポートがきめ細かくできていた発表でした。患者さんへのホスピタリティで、自分がどうかかわっていくのかを見直すきっかけにもなりました」と講評しました。

さらに、「看護部では特別な看護技術を高めていく制度を設けていきます。点滴や人工呼吸器のスペシャリストなど病院独自の認定制度を設けていきたい。その一方で、回復期やリハビリの病棟を持つ病院では、オールマイティーな知識や経験を持つジェネラリストも重要で、育成していきたい」と話しました。

スペシャリストと ジェネラリストを育成

平成27年 3月19日

